

嘉納治五郎の自他共栄の形成要因

スポーツ文化研究領域

5007A044-0 長島和幸

研究指導教員： 友添秀則教授

【本研究の目的・方法】

「身体活動を通じた教育」という観点から学校体育を捉える上で、また、「近代という特殊な時代に日本独特の身体運動文化を創始した」という観点から日本の近代スポーツ思想を捉える上で、嘉納治五郎に関する研究は重要な視座を与えるものだろうと考えられる。

本研究では「自他共栄」を対象にその形成過程、形成要因を明らかにしていくこととする。

嘉納への直接取材のかなわない現在、遺された文献資料、講術筆記、論説、著作、並びに周辺関係資料等によって考察する。

嘉納の思想形成を草創期・伸展期・完成期・啓蒙期に分けることができるが、年代を分類すると以下のようなになる。

草創期：万延元(1860)年～明治 14(1881)年

嘉納誕生から 22 歳まで

伸展期：明治 14(1881)年～大正 9(1920)年

嘉納 22 歳から 61 歳頃まで

完成期：大正 9(1920)年～大正 11(1922)年

嘉納 61 歳から 63 歳まで

啓蒙期：大正 11(1922)年～昭和 13(1938)年

嘉納 63 歳から 79 歳永眠まで

本研究では大正 11(1922)年に発表された「自他共栄」の形成要因を明らかにすることを目的に、以下のように研究を進行させていく。

第一章・・・思想形成草創期の考察

第二章・・・思想形成伸展・完成期の考察

第三章・・・精力善用・自他共栄の概念考察

第四章・・・自他共栄の形成要因の考察

【各章の概要】

○第一章

第一章では、嘉納の生涯を幼年期、少年期、青年期に分類し、それぞれの時期にどのような教育を受け

てきたのか、どのような人とのかかわりがあったのか等、歴史的事実や言説をもとに分析してきた。

嘉納は、自身の人格を形成する上で、母からの影響が強かったと考えられる。また、豪商であった嘉納家にうまれた治五郎は、豊かな財力や父親の教育方針によって、常に高い水準の教育を受けることができた。第一節では、寺子屋に通わず、山本竹雲の家や、山岸という医師の家に通ったときの様子、第二節では、成達書塾、三叉学舎、育英義塾、東京外国語学校での様子、そして第三節では、開成学校、東京大学での様子を述べた。そして、この中でも特に、東京大学において「お雇い外国人」として教鞭をとったフェノロサ、あるいは東大における教授陣からの学理・学説の影響を強く受けたということを述べた。

○第二章

第二章では、嘉納が行った実践としての教育活動を中心に考察を行った。まず、嘉納が生涯をかけてその普及に努めた、講道館柔道の創始について述べた。非力な身体を自覚したのを契機に、柔術修行をおさめたこと、そして柔道創始に至ったということ、について述べた。その上で、術から道へ変化した過程を考察した。

また、学習院教頭時代、中国人教育、嘉納塾、欧州旅行、熊本時代、東京高等師範学校等における教育者としての嘉納をみてきた。そして、東京高等師範学校を退職した後、大正 11(1922)年の講道館文化会設立と同時に精力善用、自他共栄の喧伝に至ったということを述べた。

○第三章

第三章は、精力善用、自他共栄の概念について考察した。第一節では、精力善用の芽生えと形成過程をみることで、精力善用とは何かを明らかにしていった。精力善用とは、柔術の「柔の理、柔能く剛を制す」

から受け継がれてきたものであること、しかし「柔の理」には限界があることを述べていった。そして、普遍的な力の用い方を再定義した結果、「心身の力を最も有効に使用する」という、精力善用がうまれたということを述べた。

続いて、自他共栄とは何かについて第二節で述べた。自他共栄は、「思想の混乱」や「道徳の退廃」という時代背景をもとに「国民道徳の統一をはかろう」とした結果うまれたものであったこと、精力善用の指す善行を目的化したものであること等を述べた。

また、自他共栄の概念を捉える際に、精力善用との連続・関連性に言及した。精力善用と自他共栄を区別してみるときは、精力善用は自己充実の原理であり、自他共栄は融和の原理といえること、つまり、精力善用は「個人」のレベルにおいて発揮されるものであり、自他共栄はあくまで「社会」のレベルにおける理想として区別されると述べた。そして、道徳的観点から個人と社会の関係を指し示すという点で、「最大多数の最大幸福を善とする」功利主義との関係性をみることができると述べた。

○第四章

第四章では、自他共栄の形成要因を次のように述べた。第一節で家庭環境要因について、第二節で時代・社会的要因について、第三節で思想作用レベルとしての要因について述べた。家庭環境要因としては、母親からの影響、幼少からの教育、その教育を支えた豊富な財力が挙げられることを述べた。時代・社会的要因としては、近代化によって柔道を構成していったこと、治五郎の中国観（アジアという意識。特に中国

との関係を意識したことから）、フランスの道徳教育論等が挙げられるということを述べた。思想作用レベルとしての要因の中では、ナショナリズムとインターナショナリズムの混成、西洋的功利主義と東洋的儒教思想の昇華について述べた。

これらの形成要因によって、治五郎が自他共栄説を形成し、唱道していったと考えられる。

○結章

本研究では、自他共栄説の形成要因を明らかにすべく、遺された資料をもとに、治五郎の生涯、精力善用説の形成過程、自他共栄説の形成要因を考察してきた。

その結果、自他共栄の形成要因として、家庭環境要因、時代・社会的要因、思想作用レベルとしての要因を挙げることができた。そして、これらの要因によって、精力善用を目的化したものとして自他共栄を確立させ、精力善用と自他共栄を同時に唱道していったということを述べた。

序章の「本研究の限界」でも述べたが、本研究では、資料に制約があったことにより、考察に限界が生じたという反省がある。

資料に関して、治五郎は英文日記をつけており、この日記が治五郎の思想を解明させる上で、鍵になるだろうと考えられる。資料の公開を期待したい。

最後に、自他共栄説の継承や伝播について、特に、中国人教育をする中で、自他共栄思想が、どの様に継承・伝播されたのかを解明していく必要がある。今後の課題としたい。